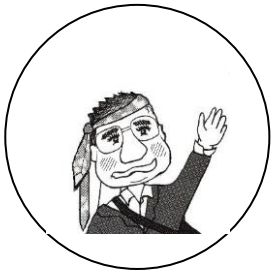
インド大魔王のエッセイ　　２０２５年６月号

大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話
発行：トラベル・ミトラ・ジャパン　　ぽん子画
（530-0041）大阪市北区天神橋 1-18-25　第３マツイ・ビル 201　ＴＥＬ：06-6354-3011
お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。（E-mail：daimao@travelmitra.jp）

霧が覆い隠すシッキム王国の〝神秘〟（８）

カリンポンは標高 1200 メートルで、ダージリン（2000 メートル）より低い。「私たちが遊ぶ尾根」の意味らしい。ここはチベットとの交易で栄えた街であった。1904 年に河口慧海もチベット潜入のときに滞在していた。第二次世界大戦中に陸軍の諜報員としてチベットに潜入した日本人（木村肥佐夫、西川一三）が、敗戦後にやってきてチベット新聞社で働いていたという。戦争は終わたのに、日本に帰らず情報収集の為に滞在していたのか。

わがマル秘の場所は何処か、と道を尋ね尋ねしながらカリンポンの山道をあがっていった。「あった！」と思わず叫んでしまった。
館は頑丈な鉄の門で閉ざされていた。門壁に朱色の文字で「CROOKETY」と描かれていた。曲がりくねった（Crooked）意味のだろうか。（間違いない。ここだ！）
鉄の門は重く館まで 50 メートルは離れていて声は届かない。運が良いことにサーバントが出てきた。声をかけると足早に館に入っていった。すぐに女性の館主をつれて戻ってきた。事情を話すと中に招き入れてくれた。円形の芝生の中に、赤い球三個が三角形をなしている。館主が説明してくれた。円は永遠を、三角形は宗教、芸術、科学を、三つの球は過去、現在、未来を意味している。「知っています」と言うと、館主は少し驚いた。（そりょうそうだろう）ナーガルを訪れ、さらにカリンポンまでやって来た物好きな日本人はまずいないだろう。
館は 1940 年代英国人によって建てられた。後に欧風に改築された。エレナはこの家を借り、1949 年に長男ジョージ・レーリッヒ（1902-1960）と共に住んだ。彼女の死後 2000 年にブータン王女に譲渡された。2001 年にイタリア人が買収して、現在は博物館になっている。

内門を入ると三角屋根の西洋風の木造建築がある。館は正面が玄関になっている。左は暖炉があるリビング・ルームになっている。大部分が改装されたが、暖炉だけはそのまま保存されている。その奥が事務所になっている。絵葉書などが販売されている。右の部屋はレーリッヒの作品などが展示されている。二階の左奥はエレナの書斎自室、次の瞑想室には祭壇とブラジルから取り寄せた大きな水晶がある。神秘的な雰囲気が残されている。
右奥は長男ジョージの自室である。壁面にはレーリッヒのヒマラヤを描いた作品が展示されている。
庭園にはエレナが座っていた石椅子がある。ナーガルでは連峰しか遠望できなかったが、

ここからはヒマラヤ高峰カンチェンジュンガ(8,500m)が望める。残念ながら、わられは一度も高峰を仰ぎ見ることができなかった。

長男ジョージ・レーリッヒこそ、中根千枝先生の恩師3なのである。つまりわが輩の恩師1の恩師2の恩師3ということになる。中根はまだ研究成果がでていないチベットにターゲットを定めてチベット語を習い始めた。それでチベットに潜入したことのある多田等観（秋田出身）についた。ところが、「すごい東北辯なの（笑）それで私これじゃ、チベット語も東北辯になっちゃう」ということで、インドにいたジョージに教えを乞う為に手紙を書いた。すぐに「いらっしゃい！」と返信が届いてインドに留学することになった。

長男ジョージはロンドン大学付属東洋語学校インド・イラン課でサンスクリット語、ハーバード大学でパーリ語、中国語を学び、ソルボンヌ大学でインド哲学の学位を授与されている。またチベット語も学んだ学者である。

中根は一階の暖炉のある部屋でチベット語を学んでいたのだろうか、などと想像してみた。いや、暖炉の部屋は、勉強疲れを癒すための喫茶ルームで、入口右側の部屋が教室みたいだと、どうでもよいことに思いを巡らしてみた。

山下幸一はタゴールの大学シャンティニケータンで数年間に渡り日本語教師をしていた。当然タゴールのことは熟知していたであろう。「ベンガルの詩聖ロビンドラナート・タゴールの旧寓居ガウリプール・ハウス（Gau-ripur House）がある。ロビンドラナートはたびたびカリンポンを訪れ、この屋敷で幾編もの詩を書き残している」と記している。山下が訪問した1990年頃は大邸宅も無住で一部が役所として使われていた。

ところが、「CROOKETY」については著書の中で一言もふれていない。レーリッヒについて知らなかったのか、それとも中根に関心がなかったのか定かではない。

わが輩は「タゴール・ハウスはどこか？」と館主に訊ねてみた。「門からすぐ左を下ったところ」と聞いた。路行く人にも聞いたが、同じ返事がかえってきた。なんと歩いて３分程のところにあった。坂の上から見下ろすと、正に大邸宅（Gouripur Bhavan）であった。さすがアジアで最初のノーベル文学賞を受賞した富豪だと感心した。中根はジョージからチベット語を学ぶためにカリンポンにやってきた。その時に下宿したのが「タゴールの別荘（チットラ・バヌ)」だと言われている。現在は改修中で入館できなかったが、「ここに間違いない！」と勝手に確信し、あの暖炉の部屋か、それとも二階の一室かと想像をめぐらしていた。

これでカリンポンでの三つの目的の内、二つを果たすことができたと満足していた。あとはエレナの墓標を探せば目的完了である。次号ではその話をしよう。ところが、一つミステイクがあることが帰国後に判明した。